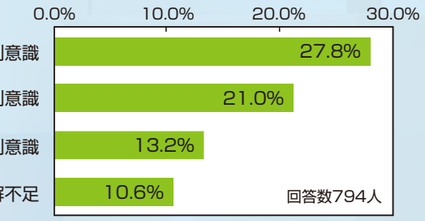
部落問題の今を見つめ、明日を考える

部落問題が日本社会の中で解消しない要因の一つとして、家庭や地域社会の中で根強く残る偏見や差別意識が挙げられています。ここでは、子育て世代のみなさんに「これまで部落問題とどう向き合ってこられたのか、そして、今後どう関わっていこうとされているのか」をインタビューした内容をまとめてみました。

Q 部落問題が生じる原因や背景として考えられることは何ですか。（単数回答）

A



「2019（令和元）年　西脇市人権についての市民意識調査結果」

〈インタビュー①　40代男性〉

若いころ生まれ育った地元以外で、被差別部落を誹謗する発言が日常的に飛び交う状況を目の当たりにする機会があり、部落差別の厳しい実態を感じた。結婚に際しては、交際相手から両親が「許すわけにはいかない。」と強く反対しているという告白を受けたことがある。自分の父親が被差別部落出身であることで結婚差別を受けたように自分も同じ目にあったが、解放学級で部落問題について学習していたおかげで、負けることなく、彼女と一緒に両親や親せきに結婚を認めてもらえるよう粘り強く話ができ、結婚することができた。

結婚後は、結婚を認めてくれた妻の両親を失望させないように、妻が被差別部落に嫁いだことでつらい思いをしないようにするためには、自分に力をつけることだと頑張ってきた。ただ、自分の子どもたちには、被差別部落出身であることを伝えていない。「知らないですむなら、言わないでおきたい。」という思いがあるが、それが正しい判断なのかどうか自問自答している。子どもたちが部落問題に「いつ、どこで、どう出会うか、強い衝撃を受けるのでは。」と心配している。

〈インタビュー②　50代男性〉

小中高と部落問題をほとんど意識することなく大人になったように思う。そんな自分が部落問題に直面したのは、妻との結婚のとき、母親が「あの子、どこの子？」と聞いてきた時だ。父は、そのようなことは何も言わなかったが、母親は「どこの生まれか」ということにこだわりを持っていたように思う。私は母親に、「彼女がどこの生まれであろうが関係ない。それがどうしたん？」と言ったことを鮮明に覚えている。私たちの結婚の場合、双方の親がそれぞれ身元調べを行っていたようである。

私の息子もつい最近結婚したが、私たち夫婦は、そういったことには何も関心をもたなかった。二人が若いことを心配したぐらいである。息子も彼女がどこの生まれであるかということには、一切こだわりを持っていないようである。それは、子どもたちが学校で差別がおかしいことだということを学んでいるからであり、伴侶を選ぶ基準に「どこで生まれたか」を入れていないからだと思う。部落差別については、親がどんな考えをしているかが極めて大きいと思う。私には、「令和になっても、まだ部落差別をするの？」という感じで、不思議でならない。

〈インタビュー③　40代女性〉

子どもの頃、被差別部落の同級生たちが公民館などに行って、勉強をしているのは知っていたが、特に関心もなかったし、こだわりもなかった。

大人になり、被差別部落出身の夫と出会い、この村に嫁いできた。両親に夫との結婚について話した時、両親は夫の住所から夫が被差別部落の青年であることを知っていたようで、反対された。しかし、最後には、「親戚に迷惑をかけるかもしれへんが、お前は本当に後悔せえへんのやな。」と言って、結婚を認めてくれた。

結婚後、子どもにも恵まれ、幸せな日々を過ごしてきた。この間、つらい思いをしたこともないし、差別されたこともない。また、子どもたちは、被差別部落出身であることは知らないし、子どもたちにあえてそのことを伝えるつもりもない。将来、何か問題が起きるようなことがあったとしても、その時はその時で考えるつもりでいる。

【用語解説】 解放学級とは、部落差別の結果、被差別部落の内外で見られた大きな学力格差を埋めるべく、同和対策事業特別措置法に基づいて1974（昭和49）年から被差別部落の子どもたちの学力向上と仲間づくりをめざして開設された学級のことです。それ以前は、「学力補充学級」「学力促進学級」と呼ばれていた時期もあります。

〈インタビュー④　40代男性〉

子どもの頃、解放学級で学んでいたが、自分たちと地区外のどこが違うのか、ずっと疑問に思っていた。当時、学校では部落問題学習をしっかりやり、この問題に対する正しい理解ができていたので、被差別部落出身であると言って友達から差別されるようなことはなかった。部落差別反対のビラ配りやゼッケン登校をしたこともあったが、今思い返して、その後の自分の生き方に役に立ったと思っている。

これまで、部落差別に直面したことがない。結婚のときも、相手の家族親戚から反対されるようなことはなかったので、仮にそういう場面に遭遇した場合、適切に対応できるか不安なところもある。

部落問題について、子どもたちに知らさないまま大きくしようとは思っていない。子どもには、上を向いて、胸を張って生きていってほしいから、親としてこの問題についてしっかり教えたいと思っている。学校でも、部落問題については、たくさんある人権課題の一つとして正しく学ぶ学習をしっかりやってほしいと思う。

〈インタビュー⑤　30代女性〉

このインタビューの依頼を聞いたとき、私の生活から永らく消えていた「部落問題」がふつふつとよみがえってきたというのが正直なところだ。小学校時代、友達が解放学級に行っていた。学校で、「部落差別は間違った差別である。」ということを学習していたから、解放学級に行っている友達のことを「頑張っているな。」という思いで見ていた。

私が結婚に当たって夫になる男性のことを両親に告げたとき、父親は、「どこの生まれや、どこに住んでるの？」と聞いてきた。両親の世代にとっては、子どもの結婚相手が被差別部落出身かどうかはとても大きなことで、私の結婚相手を認めるかどうかの最大の判断基準であったと思う。私は、子どもに「どこの子」「どこの町」ということを聞くつもりもないし、気にもならない。ただ、部落であるかどうかにこだわらない私だが、今後、何か別のことにこだわって人を差別したり、排除したりすることはないとも言い切れない。私たちの世代は、たぶん私と同じなのではないかと思う。

部落差別が今も、そして、近い将来もあるなら、子どもたちには学校でこの問題を正しく学習してほしい。周りから間違った情報が入ってきたときに、判断を誤らないためにも。

〈インタビュー⑥　30代女性〉

子どもの頃、隣保館で部落問題の学習をやっていたが、「部落差別はあるのかな？」程度の甘い認識であった。ただ、解放学級で勉強したことは意味があったと思っている。

成長する過程で、部落差別に直面するようなことはなかった。唯一、夫と結婚する際に、夫の父親が「あの子、部落違うのか。」と家族の中で話を出したようだが、母親の「それがどうしたん？」という一声で問題にもならなかったと聞いている。友だちが、結婚差別にあったというような話も聞いていない。

高校入学以降、この問題について何も学習していないので、差別に直面した場合に、きちんとしたことが言えるかどうか不安もある。今後、子どもたちへの教育では、部落問題を特別扱いするのではなく、人権問題全般の中で扱うことがいいのではないかと思う。ただ、自分の子どもに被差別部落出身であることをいかに伝えるのか、私にとって大きな課題である。今は、伝えようとは思っていない。考えれば考えるほど難しい問題だから。

〈インタビュー⑦　40代女性〉

解放学級には、両親に言われるまま参加していた。そこで、学習することにより、子どものときから、常に「自分は被差別部落の子だ」ということを意識していた。

結婚のとき、夫の父親から「部落の娘さんとはダメだ。どうしてもと言うなら、家とは縁を切ってくれ。」と強く反対された。最終的には、夫の父親が病気になったこともあり、結婚を許してもらった。夫は、結婚に反対した父親が恥ずかしいと言っていた。結婚反対を乗り越えていけた大きな原動力は、子どもの頃の解放学級での学び（「自分たちに差別される謂れが何もない」）にあったと思う。

今、日常生活の中で、部落差別を意識することはないし、子どもたちの将来にも特に不安は感じていない。そんな中ではあるが、子どもたちに「私が被差別部落出身である」ということは伝えている。子どもたちが、もしも将来、部落差別に直面することがあったら、正しい知識が必要になってくる。私の子どもたちはもちろんのこと、すべての子どもたちに人権学習の中で部落問題について正しく学習してほしいと願っている。

部落問題の解決を願って企画した今回のインタビューに、７名の市民のみなさんが快く応じていただきました。ご協力をいただいたことで、部落問題の現状とこれからの課題が見えてきました。これをきっかけに、部落問題の解決に向けた市民の皆さまの取組が一層進んでいくことを願います。